

國民國家を保障するもとして蘇った 『三國遺事』の世界観*

-韓國初中等教育の歴史教科書を中心に-

朴正義**

目次

- I. はじめに
 - II. 『三國遺事』の世界観
 - III. 歴史教科書に見られる『三國遺事』
 - IV. おわりに
-
-

I. はじめに

現在、韓日間においていくつかの問題が争点となっているが、獨島問題をのぞいて、全て過去の歴史をどうみるかという歴史観の相違から起因する。この歴史観は、現實の世界をどうみるか、つまり現實世界において自國をどう位置づけるかという世界観の問題である。歴史教科書問題もこの世界観の問題である。

歴史教科書を記述するにおいて、記録された事件をもとにするのは當然であるが、問題はそれをどう解釋し記述するかである。同じ事件でも國・時代によって解釋が180度異なる。例えば、過去においてナチスの歴史はドイツの榮光の歴史として自國の「歴史」教科書に記載されたが、今はドイツ歴史の恥部として、周辺國家にとっては今も昔も侵略の歴史として教科書に載せられている。また、現在の北朝鮮の「歴史」教科書は、金日成-金正日体制を保障しそれを未來に繋げるべく書かれている。韓國においても事情は同じで、解放後の混亂時期の歴史記述は軍事獨裁政權下と民主化された現在とでは大きな違いが見られる。このように「歴史」教科書は書かれた時代の現實世界を保障すべく、そしてそれを未來に繋ぐべく書かれているため、同じ事件でも國・時代によって、その内容は異なってくるのである。即ち、現實の世界をどうみるかという世界観の問題といえる。この世界観の違いは、當然過去の歴史の評価も変える。現在の韓日兩國の「歴史」教科書において過去の歴史評価に顕著な差が見られるのも、そこに示された世界

* 이 논문은 원광대학교 2005년 교내 학술연구비의 지원에 의하여 이루어진 것임

** 圓光大學校 日語教育科 教授 日本學

観の違いから起因するといえる。ならば現在の韓日の「歴史」教科書の世界観はなにをもって成立したのか。ともに、世界の主流がそうであるように國民國家観をそこに描いていることは同じである。が、問題はその國民國家を何を持って保障したかである。日本は『古事記』、韓国は『三國遺事』にあらわれた世界観の継承と、筆者は結論付けたい。

日本は古代、『古事記』は天皇を世界の秩序の中心とする世界観を完成させ、そこに韓半島を含んだ。これは、戦前の大東亞という世界観に引き継がれ、現在、國民國家を保障するものとして扶桑社の『新しい歴史教科書』に見事に復活し、多くの支持を得ている。そこでは、アジアは日本を盟主とする大東亞共榮圏の傘の中にあり、對等のパートナーとしてアジアは存在しない。パートナーは大東亞の外にあるもう一つの世界に君臨する強大國家アメリカだけである。過去の反省から始まったアジアを對等のパートナーとする戦後に反するものであり、韓国及び周辺のアジアにおいて受け入れがたい世界観といえる。

これに對し韓国はどうであるか。まず、教科書にあらわれた『三國遺事』を見る前に、本来の『三國遺事』の世界観が、どうであったか。これについては、拙著「『三國遺事』の世界観」¹⁾で示した通りである。簡単に示せば次のようになる。

II. 『三國遺事』の世界観

日本では、實權者の目まぐるしい交替は見られるが、『古事記』の根本である「天皇」を世界の中心とする世界観を持つことによって、その國体を維持しまた自國の存在を保障しえた。その反面、王朝の交替を繰り返し、日本のように「天皇」といものを創造しえなかった韓半島では、韓半島を世界の中心とする古代「廣開土王碑文」の世界観²⁾は、高句麗王朝の滅亡後、何ら意味をなさないものとなった。ならば何を持って、自分達の存在を保障しえたのであろうか。これを物語ってくれるのが『三國史記』『三國遺事』である。しかし、成立年度に約150年の差があり、時代による要求の相違によって、二つの世界観にも大きな違いを見せている。

『三國史記』は、儒教の合理主義をかかげその内容面においても荒唐無稽な話を削除し、中國の皇帝を自國の王の上に位置付ける。これは中國の皇帝を中心とする世界の中に自國を組み込む世界観、つまり中國とのつながりによって自國を保障するものである。しかし、その後、高麗が蛮族として蔑視していた元によって中國が減ばされ、さらに高麗も元の侵略を受けるという國家存亡の時期に、『三國史記』の中國を中心とする世界観は自分達の存在を保障するものとして何ら用をなさなくなっていた。ここに『三國遺事』が登場したのである。

1) 朴正義(2004)「『三國遺事』の世界観」『日本文化學報』 第21輯 韓國日本文化學會

2) 權五曄(2004)『廣開土王碑文』研究』J&C

『三國遺事』は荒唐無稽の神話や伝説を重視し、中國の皇帝と同じく自國の王の死に對しても「崩」の字を使用する。『三國史記』では、中國の皇帝にだけ「崩」の字を使用し、自國の王には一ランク下の「薨」の字を使用したのとはずいぶん異なる。この「崩」の字の使用に値するのは「天子」だけで、「天子」というのは天下つまり世界を統治する君主の名称である。しかし、『三國遺事』は『古事記』のように屬國や朝貢國を従える「自國を中心とする帝國」をそこに描いていない。ならば『三國遺事』において「崩」の字を使用する根拠は何か。『三國遺事』の最初に出てくる「卷第一 紀異第一 古朝鮮條」にその答えがある。古朝鮮の始祖檀君は桓因の子である桓雄の子として誕生するが、この桓因に本文では割注「謂帝釋也」をつけて説明している³⁾。「帝釋」は言うまでもなく「帝釋天」で、梵天とともに佛法を護る神である。「帝釋天」の梵名は「釋迦提桓因陀羅」といい、本文に書かれた桓因だけでも十分に意味が通じるはずであるにもかかわらず、念をいれて割注「謂帝釋也」をつけ、古朝鮮が仏の意思によって開かれた國、さらに仏によって導かれ護られた國と、『三國遺事』は最初に確認する。つまり、『三國遺事』の「古朝鮮條」が示しているのは、韓半島はその紀元から仏の意志によって開かれた統一國家民族であり、未來永劫にわたって仏に護られる國であることを物語っている。さらに續けそれぞれの國の條では、古朝鮮以後の韓半島に獨自に建國された國々も、全て天または天帝と結付くことによって國が開かれたと記す。これにより、古朝鮮の檀君以後も、支配者たる王は全て天帝すなわち帝釋天の血を受け継ぐ。つまり仏の意思によって國が開かれたことを語っている。さらにその後、仏の保護によって國が繁榮することを興法篇以下7篇の仏教關連説話が實証する。中でも、「卷第四 義解 第五 義湘傳教條」に、注目すべき説話がある。

智儼が前日の夜、夢をみると、海東(韓國)に大樹が生えて枝と葉が茂り、それが延びて神州(中國)を蔽い、その上に鳳の巢があった。上ってみると一個の摩尼宝珠があり、その光明が遠くまで照していた⁴⁾。

義湘の話であるが、韓半島に仏教が隆盛し世界の中心として君臨する中國に代り韓國が世界の中心となることを暗示するのである。これは、『三國遺事』が最初に述べた「天帝の孫である檀君によって統治された韓半島」とも脈絡が通じる。かかれた時点で世界の中心というのではなく、未來を問う「未來に世界中心となる世界観」である。しかし、これによって『三國遺事』が自國の歴代の王の死に天子にだけ値する「崩」という字を使ったことが納得でき、世界の中心としての世界観を持つといえる。

さらに、前回の論文「『三國遺事』の世界観」に記載しなかったが、『三國遺事』に天竺の

3) 『三國遺事』卷一 紀異一 古朝鮮條「昔有桓因(謂帝釋也)庶子桓雄……雄乃仮化而婚之孕生子號檀君王儉……」

4) 『三國遺事』卷第四 義解第五 義湘傳教條「儼前夕夢一大樹生海東。枝葉溥布。來陰神州。上有鳳巢。登視之。有一摩尼宝珠」

記事が異常に多いことも特徴である。ここにそれらのいくつかのを拾うと、「卷二 紀異二 駕洛國記條」に、上帝の命で、印度の王女が駕洛國に嫁に来るとい記事⁵⁾があり、「卷三 塔像四 皇龍寺九層塔條」⁶⁾に新羅の王の祖先を印度とする記事が見える。これは印度と韓半島の因縁を示すものである。さらに、「卷三 塔像四 皇龍寺丈六條」⁷⁾⁸⁾⁹⁾に、仏教の發祥地印度におい

- 5) 『三國遺事』卷二 紀異二 駕洛國記條「於王與后共在御國寢。從容語王曰。妾是阿踰陀國公主也。姓許名黃玉。年二八矣。在本國時。今年五月中。父王與皇后顧妾而語曰。爺孃一昨夢中。同見皇天上帝。謂曰。駕洛國元君首露者。天所降而俾御大寶。乃神乃聖。惟其人乎。且以新家邦。未定配偶。卿等須遣公主而配之。言訖升天。形開之後。上帝之言。其猶在耳。你於此而忽辭親向彼乎往矣。妾也浮海遐尋於蒸棗・移天竄赴於蟠桃。臻首敢。龍顏是近(さて、王とともに寢殿に入られた後は、王に向かっておもむろに語るのだった。「私はもと阿踰陀國(印度にある國)の王女で、姓は許氏、名は黃玉と申し、年は36才でございます。今年の五月、本國に居たとき、父王と皇后が私に向かっておっしゃいました。『昨夜夢の中で皇天上帝は駕洛國王の首露は天が降して王位に就かせたものであり、この人こそは神聖そのものである。新しく國を治めているが、未だ配偶者が決まっていない。そなた達は王女を遣わして配偶を定めなさいとおっしゃり、言い終わると天に昇っていかれた。眠りから覚めても未だ。上帝の言葉が耳に残っている。だからおまえはただちに親と別れてそこに行きなさい』。それで私は海に浮かんでいる蒸棗を集め、天に昇って蟠桃(仙桃)を得てからここにまいり、女のみでありながら、恐れ多くもあなたの龍顔に近付くことができたのです)」
- 6) 『三國遺事』卷三 塔像四 皇龍寺九層塔條「慈藏法師西學。乃於五臺感文殊授法[詳見本傳]。文殊又云。汝國王是天竺刹利種王。預受佛記。故別有因緣。不同東夷共工之族。然以山川崎嶇。故人性巖悖。多信邪見。而時或天神降禍。然有多聞比丘・在於國中。是以君臣安泰・萬庶和平矣。言已不現(慈藏法師は西唐に留學したおり、五臺山において文殊菩薩の授法を感じたのであった(詳細なことは本傳に見えている)。(そのとき)文殊が、「汝の國王は天竺の刹利族の王で、かねてから仏記(仏の予言を記した文)を受けていた。(これは)特別な因縁があったからであり、東夷の共工族とは同じでない。山川が険しいため、人性が?悖(荒っぽくて道理にそむく)で邪見を多く信じ、時おり天神が禍を降ろしているけれども、多聞比丘が國の中にいて、そのため君臣が安泰で、萬民が平和である」と告げ、言い終わると姿がみえなくなりました)」
- 7) 『三國遺事』卷三 塔像四 皇龍寺丈六條「未幾。海南有一巨舫。來泊於河曲縣之絲浦[今蔚州谷浦也]。檢看有牒文云。西竺阿育王。聚黃鐵五萬七千斤・黃金三萬分[別傳云。鐵四十萬七千斤・金一千兩。恐誤。或云三萬七千斤]。將鑄釋迦三尊像。未就。載缸泛海而祝曰。願到有緣國土。成丈六尊容。并載模樣一佛二菩薩像。縣吏具狀上聞。勅使卜其縣之城東爽塏之地。創東竺寺。遯安其三尊(まもなく南の海から巨船一隻が、河曲縣の絲浦 今の蔚州の谷浦)に來て停泊した。(船の中を)檢げてみると、公文があって、(そこに)「西竺(印度)の阿育王が、黃鐵五萬七千斤と黃金三萬分を集めて(別傳には、鐵四十萬七千斤と金一千兩だといっているが、これは間違いだろう。或は、三萬七千斤ともいう)、釋迦三尊像を鑄造しようとしたが完成できなかったので(仕方なく)船に載せて海に浮かべてますが、願わくは因縁のある國土にいて、丈六尊が完成できますよう。一の佛像と二つの菩薩像の模型も併せてのせる」と書かれてあった。(これを見つ 縣吏が書狀を詳しく書いて報告すると、王が使者を送って其の縣の城の東に、清潔な地を擇んで東竺寺を建て、その三尊を安置した)」
- 8) 『三國遺事』卷三 塔像四 皇龍寺丈六條「時王之太子獨不預斯事。王使詰之。太子奏云。獨力非功。曾知不就。王然之。乃載缸泛海。南閩浮提十六大國・五百中國・十千小國・八萬聚落。靡不周旋。皆鑄不成。最後到新羅國。眞興王鑄之於文仍林。像成。相好畢備。阿育此翻無憂(その時王の太子がその仕事に加わらなかったで王(阿育王)がその譯を詰問すると、太子は、「一人の力ではできないことだから、前々からこうなるだろうと思っていました」と答えた。王がもっともだと言って、それを船に載せ、海に浮かべて南閩浮提(南方の印度國)十六大國と、五百中國、十千の小國、八萬の村落をくまなく回ったけれども、みんな鑄造に失敗した。最後に新羅國に到着した。眞興王が文仍林において鑄造して完成し、(仏像の)相好(顔付き)も完備した。(このことを聞いて)阿育王も今度こそ憂いがなくなった)」
- 9) 『三國遺事』卷三 塔像四 皇龍寺丈六條「後大德慈藏西學到五臺山。感文殊現身授訣。仍囑云。汝國皇龍寺。乃釋迦與迦葉佛講演之地。宴坐石猶在。故天竺無憂王。聚黃鐵若干斤泛海。歷一千三百餘年。然後乃到而國。成安其寺。蓋威緣使然也[與別記所載不同](その後、大德(高僧)の慈藏が西方に留學し五臺山に至ると、文殊が現身して

て造ることができなかった仏像を新羅において完成するという記事が出ている。これは、仏教隆盛の地が、印度より韓半島に移ることを暗示し、仏教が將來隆盛するとして上帝が印度から王女を送った「卷二 紀異二 駕洛國記條」の記事に通じるものである。そして、結論として「卷三 塔像四 前後所將舍利條」に

大教(仏教)が東方へ廣がってきたことは、限りなくめでたいことである。讚にこういつている。

「華月(中國)と夷風(東方)、互いに煙波を隔て、鹿園の鶴樹、二千年を経たり。海外(東國)に流伝したことはまことに慶賀。東震(東國)と西乾(印度)は共に一つの天なり¹⁰⁾。

という記事がある。これは、仏教を通じ、韓國・中國・印度は一つと云っている。つまり韓國・中國・印度三國が同じにある世界。この仏教の普遍的世界観の中で、自國の存在を認める。そこには、日本はその世界に含まれることなく、外にある。日本が中世にもった三國世界観(天竺・震旦・本朝=日本)、韓半島が日本に含まれるとする世界観とは異なる。ならば、この『三國遺事』の世界観が、歴史教科書にどのように蘇っているのであろうか。

III. 歴史教科書に見られる『三國遺事』

1. 『高等學校 國史』

韓國の高校の歴史教科書は、韓國の國史編纂委員會・國定図書編纂委員會によって編纂された國定教科書『高等學校國史』¹¹⁾だけである。この『高等學校國史』の第一章「韓國史の正しい理解」²條「韓國史と世界史」の最初の項「韓國史の普遍性と特殊性」において

我が民族は半万年以上の悠久の歴史をもっており、世界史においても稀れに見る單一民族國家とし伝統を受け継いできた¹²⁾

秘訣(秘密の方法)をくれながら、こうたのんだ。「汝の國の皇龍寺は釋迦と迦葉佛が講演したところの地であって、宴坐の石がなおも残っている。故に天竺の無憂王が黃鐵若干斤を集めて海に浮かべ、一千三百餘年をへた後に、はじめて汝の國に到着し、その寺を完成させた。思うにこれは偉大な因縁がそうさせたのである)」

10) 『三國遺事』 卷三 塔像四 前後所將舍利條「大教東漸。洋洋乎慶矣哉。讚曰。華月夷風尙隔煙。鹿園鶴樹二千年。流傳海外眞堪賀。東震西乾共一天」

11) 國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)「高等學校 國史」 教育人的資源部(文部科學省)

12) 「우리 민족은 만만년 이상의 유구한 역사를 가지고 있고, 세계사에서 보기 드문 단일 민족 국가로서의 전통을 이어 오고 있다」(國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)「高等學校 國史」 教育人的資源部(文部科學省) p.13)

という記事がある。これが『高等學校國史』が見る自國に對する歴史觀である。ここに、韓國が世界に誇るものとして「長い歴史」と「單一民族國家」の二つをあげている。さらに、この「單一民族國家」を、普遍性と特殊性という一見相反する概念でもって説明する。これらを保障するものとして、『三國遺事』がある。

まず第二章の第1條「先史時代の展開」で韓民族のはじまりと形成を語り、第2條「國家の形成」で國の始まりと形成を説く。第2條の最初の項目の「1 古朝鮮と青銅器文化」で、青銅器・鐵器文化の發展を記述した後、檀君の古朝鮮建國を語り、韓半島における國の始まり、即ち韓民族の國家形成を説く。この部分を記述すれば

【檀君と古朝鮮】

青銅器文化の發展にあわせ族長が支配する社會が出現した。この中でも強力な族長は周辺部族を統合しながら、徐々に族長の權力を強化していった。

部族社會において最初に國家として發達したのが古朝鮮であった。『三國遺事』の記録によれば、古朝鮮は檀君王儉が建國したとする(B.C.2333)。檀君王儉は當時の支配者の称号であった。

古朝鮮は遼寧地方を中心に成長し徐々に周辺部族を統合しながら韓半島にまで發展したが、このような事實は琵琶型の銅劍とコインドルの出土分布から知ることができる。古朝鮮の勢力範圍は青銅器時代を特徴づける遺物の一つである琵琶型の銅劍とコインドルが出る地域と深い關係がある。

古朝鮮の建國事實を伝える檀君の話は我が民族の始祖として廣く伝えられてきた。檀君の話は永い歳月にわたり伝承された記録として残されてきた。その間、ある要素は後代に新しく付け加えられもし、時には削除された。

神話はその時代の人々が關心を持つものが反映されたもので、歴史的意味が含まれている。これはすべての神話に共通する屬性である。檀君の記録も同じく、青銅器時代を背景にした古朝鮮の成立を歴史的事實として反映している¹³⁾。

13) 「청동기 문화의 발전과 함께 족장이 지배하는 사회가 출현하였다. 이들 중에서 강한 족장은 주변의 여러 족장 사회를 통합하면서 점차 권력을 강화해갔다. 족장 사회에서 가장 먼저 국가로 발전한 것은 고조선이었다. 삼국유사의 기록에 따르면 고조선은 단군 왕검이 건국하였다고 한다(B.C. 2333). 단군 왕검은 당시 지배자의 칭호였다. 고조선은 요령지방을 중심으로 성장하여 점차 인접한 족장 사회들을 통합하면서 한반도까지 발전하였는데, 이와 같은 사실은 비파형 동검과 고인돌의 출토 분포로써 알 수 있다. 고조선의 세력 범위는 청동기 시대를 특징짓는 유물의 하나인 비파형 동검과 고인돌이 나오는 지역과 깊은 관계가 있다. 고조선의 건국 사실을 전하는 단군 이야기는 우리 민족의 시조 신화로 널리 알려져 있다. 단군 이야기는 오랜 세월을 거치면서 전승되어 기록으로 남겨진 것이다. 그러는 사이에 어떤 요소는 후대로 가면서 새로 첨가되기도 하고 때로는 없어지기도 하였다. 신화는 그 시대 사람들의 관심이 반영되는 것으로 역사적인 의미가 담겨 있다. 이것은 모든 신화에 공통되는 속성이기도 하다. 단군의 기록도 마찬가지로 청동기 시대의 문화를 배경으로 한 고조선의 성립이라는 역사적 사실을 반영하고 있다」(國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會2004年「高等學校 國史」教育人的資源部(文部科學省) p.p.34-35)

以上、教科書本文の「檀君の古朝鮮建國」の内容である。まず、「部族社會において最初に國家として發達したのが古朝鮮であった」と、古朝鮮の存在を史實として確認することからはじまる。この証據として、「三國遺事の記録によれば、檀君王儉が建國したという」と、『三國遺事』の記事をあげている。また、琵琶型の銅劍とコインドルの出土も、古朝鮮の存在の証據として擧げているが、これはその当時の國家形成の可能性を示すだけで、檀君の古朝鮮建國の史實を明らかにするものではなく、決して『三國遺事』の記事を裏付けるものでない。どこまでも教科書で、檀君の古朝鮮建國を確認できるのは、『三國遺事』の記事だけである。また、「ある要素は後代に新しく付け加えられもし、時には削除された」と、檀君の古朝鮮建國の話が伝承の過程において變形されたこと認めながらも、「古朝鮮の建國事實を伝える檀君の話は我が民族の始祖として廣く伝えられてきた。檀君の話は永い歳月にわたり伝承された記録として残されてきた」と、その骨格となる話が史實であることを再確認する。さらに、これらが神話であることを意識し、神話が歴史を反映するという一般的な屬性を述べた後、「檀君の記録も同じく、青銅器時代を背景にした古朝鮮の成立を歴史的事實として反映している」と、やはり檀君の古朝鮮建國を史實として今一度確認する。執拗なまでに、檀君の古朝鮮の存在を確認するのに努めている。

この檀君の古朝鮮を韓國の始まりとすることにより、まず「長い歴史」は説明もなく保障される。次に主目的の「單一民族國家」つまり國民國家としての保障ともなる。その始まりから韓國は一つであったことを強調することによって、韓民族としてのイメージを描き易くし、その後の衛滿朝鮮、箕子朝鮮、夫餘、三國が一つの民族によって成立してきたことを説明せずすむ。つまり、いくら王朝が変わり分裂しても、檀君の古朝鮮の存在により、一つの民族によって國家が形成され續けてきたことが信じられ、ここに單一民族國家としての普遍性が納得できる。そして國民國家として現在の韓國が保障されるのである。さらに第二章1條の「2 我が國の先史時代」に、中國を中心とする文化圏を北方文化圏、漢族文化圏、華南文化圏と、東方文化圏の四つに分ける地図が載せている¹⁴⁾。この地図のなかで注目したいのは東方文化圏で、これは古朝鮮の勢力範囲と地域的に見事に合致する(圖參照)。つまり、獨自の文化をもって檀君の古朝鮮が成立したことをここに暗示するものである。この地図から、第一章「韓國史の正しい理解」2條「韓國史と世界史」の最初の項「韓國史の普遍性と特殊性」にある

世界をいくつかの文化圏に分けてその特殊性を理解することにし、一つの文化圏の中でももう一度民族文化や地方文化の特殊性を抽出することにする。すべての民族の歴史には、このような普遍性と特殊性が存在する¹⁵⁾

14) 國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)「高等學校 國史」 教育人的資源部 文部科學省 p.21

15) 「세계를 몇 개의 문화권으로 나누어 그 특수성을 이해하기도 하고, 하나의 문화권 안에서도 다시 민족 문화나 지방 문화의 특수성을 추출하기도 한다. 모든 민족의 역사에는 이러한 보편성과 특수성이 함께 존

という記事を視覚的に説明してくれる。ここに韓民族の歴史の始まりからの特殊性が納得され、「長い歴史」と「単一民族國家」、さらに「単一民族國家」の普遍性と特殊性が示されたといえる。これらすべてが、檀君の古朝鮮を韓民族國家の始まりとすることによって可能といえ、そして、これを保障するのが『三國遺事』である。



先史時代の文化圏

2. 『中學校 國史』

中學校の「國史」教科書も、國史編纂委員會・國定図書編纂委員會によって編纂された國定教科書『中學校 國史』16)の一冊だけである。この教科書の第1章「わが國の歴史の始まり」の第1條「先史時代の生活」において、韓半島にいつから人が住みだしたのか、つまり民族の起源について語り、續いて旧石器新石器さらに青銅器時代への変遷を遺跡遺物を示しながら説明する。しかし、第2條「國家の成立」に入るとその記述は大きく異なる。最初の項目「古朝鮮建國の歴史的意義は」において「檀君の古朝鮮」と「古朝鮮の成長と変遷」という題目下で、本文に檀君の古朝鮮建國が史實として記載されている。まず「檀君の古朝鮮」であるが、その内容は次の通りである。

【檀君の古朝鮮建國】

青銅器文化が形成され、滿州遼寧地方と韓半島西北地方には族長が支配する部族があらわれ始め

제한다」(國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004年)「高等學校 國史」教育人的資源部 文部科學省 p.13)
16) 國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004)『中學校 國史』教育人的資源部(文部省)

た。檀君はこれらの部族を統合し、古朝鮮を建國した。

檀君の古朝鮮の建國はわが國の歴史が非常に古いことを物語ってくれる。また、檀君の建國事實と弘益人間の建國理念は、我が民族が危機に面するたび民族の自負心を呼び起こしてくれる原動力となった。

それ以外にも檀君の建國の話を通して我が民族が始めて國を作った時の状況が推測できる。熊と虎が登場することから先史時代に形成された特定の動物を崇拜する信仰の要素が反映されていることが分かる。また、雨風雲を主管する人がいたことから、我が民族最初の國家が農耕を背景にして成立したことが推測できる¹⁷⁾。

以上その内容であるが、その中で「檀君の古朝鮮の建國はわが國の歴史が非常に古いことを物語ってくれる」の文章は、本文最初から檀君が歴史的事實であることを前提とする。その証據として、本文の下に『三國遺事』古朝鮮條の現代譯を資料としてそのまま載せている。このように、『中學校 國史』も『高等學校 國史』と事情は同じで、「檀君の古朝鮮」によって單一民族國家として現在の韓國を保障している。

この『中學校 國史』の特徴として、次のことがあげられる。第一章「わが國の歴史の始まり」第2條「國家の成立」の最初の項目「古朝鮮建國の歴史的意義は？」において、「檀君の建國事實と弘益人間の建國理念は、我が民族が危機に面するたび民族の自負心を呼び起こしてくれる原動力となった¹⁸⁾」という個所があるが、この「弘益人間」は、韓國の教育基本法第1條に教育理念として明示されている。その第1條の内容は、

教育は弘益人間の理念のもとに全ての國民をして人格を完成さしめ、自主的生活能力と公民としての資質を具有させ民族國家の發展に奉仕さしめ、人類共榮の理想實現に寄与し得ることを目的とする¹⁹⁾。

- 17) 「단군의 고조선 건국 청동기 문화가 형성되면서 만주 요령(遼寧) 지방과 한반도 서북 지방에는 족장(군장)이 다스리는 많은 부족들이 나타났다. 단군은 이러한 부족들을 통합하여 고조선을 건국하였다. 단군의 고조선 건국은 우리나라의 역사가 매우 오래 되었음을 말해 준다. 또, 단군의 건국 사실과 홍익인간의 건국이념은 우리 민족이 어려움을 당할 때마다 자긍심을 일깨워 주는 원동력이 되었다. 그 밖에도 단군의 건국 이야기를 통해서 우리 민족이 처음 나라를 세웠을 때의 상황을 짐작해 볼 수 있다. 곰과 호랑이가 등장하는 것에서는 선사 시대에 형성되었던 특정 동물을 숭배하는 신앙의 요소가 반영되어 있음을 알 수 있다. 또, 비, 바람 구름을 주관하는 사람이 있었다는 것에서는 우리 민족 최초의 국가가 농경 사회를 배경으로 성립되었다는 것을 짐작할 수 있다」(國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004) 『中學校 國史』 教育人的資源部 p.18)
- 18) 「단군의 건국 사실과 홍익인간의 건국이념은 우리 민족이 어려움을 당할 때마다 자긍심을 일깨워 주는 원동력이 되었다」(國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004) 『中學校 國史』 教育人的資源部 文部科學省) p.18)
- 19) 「교육은 홍익인간의 이념 이내 모든 국민으로 하여금 인격을 완성하고 자주적 생활능력과 공민으로서의 자질을 구유하게 하여 민족국가 발전에 봉사하며, 인류공영의 이상실현에 기여하게 함을 목적으로 한다」文教法定編纂會(1988 『文教法定』 教學社 p.14)

である。これは、韓國の教育の出発点でありかつ到達点といえるものである。これを踏まえることによって、本文の「檀君の建國事實と弘益人間の建國理念は」に續く「我が民族が危機に面するたび民族の自負心を呼び起こしてくれる原動力となった」という部分が納得できるのである。現在の理念でもって「弘益人間」を語るもので、つまり現在の理念によって作り出された過去から、現在の韓國の教育を保障するものとして登場している。『三國遺事』は何も「弘益人間」をその目的としているのではなく、「弘益人間」が歴史的に「我が民族が危機に面するたび民族の自負心を呼び起こしてくれる原動力となった」という記録は残っていない。しかし、ここで「弘益人間」を國民國家の教育理念として保障するのが、『三國遺事』である。

3. 初等教育の教科書

初等教育の教科書は、教育人的資源部(文部科學省)から出ている一種類だけであることは中等教育の教科書と同じであるが、初等教育では歴史だけ扱った教科書はなく、社會全般を網羅した教科書「社會」だけである。また、初等教育の教科書の特徴として4年生1學期まではその地域に焦点を絞って書かれているため、地域ごとに教科書の内容は異なっている。ここでは、全羅北道で使われている教科書を使用した²⁰⁾が、問題が韓國全土に及ぶところは全國共通であり、當然韓國の歴史に關するところも全國共通である。このため、全羅北道の教科書を使用したこと²¹⁾に關して、何ら問題がない。4年生の2學期「社會4-2」²⁰⁾から對象は地域から韓國全体となり、國の歴史をその内容に盛り込む。まず、第一章「文化財と博物館」第2條「昔の都の地と文化財」の「1年表と歴史地図」に掲載された年表の最上段に檀君の繪と古朝鮮を記す²¹⁾。そして、この檀君の繪の上に「檀君王儉が紀元前2333年に古朝鮮を建てた(『三國遺事』)」の説明を添えている。『三國遺事』を根據として、韓民族の國家形成の始まりを古朝鮮と確認している。しかし、内容はこれだけである。その後も、本文はなく三國・統一新羅と渤海・高麗の地図を載せているだけである。これらにより、韓國の歴史の流れを視覺的の捉えさせ、本題の文化財の話へと續く。この年表は、檀君の古朝鮮を最上段に置き、それから下段にそっていくつかの國に分かれ、それを新羅が統一し、さらに後三國時代に分かれ、それをまた高麗が統一、そして朝鮮を経て現在に繋がるという構図になっている。これを見れば一目瞭然、韓民族は古朝鮮という統一民族國家として出發し、その後分裂を繰り返すが、結局統一されていく。始祖としての檀君そして古朝鮮の存在により、統一の必然性が保障される。本文の内容が無くても、年表が視覺的に語ってくれる。これは、くどいようだが、最上段に古朝鮮が描かれているからである。現在の統一國家(一時的に南北に別れているが、統一されるべき國家としてお互い認識)の象徴として古朝鮮があるが、これが逆轉してこの古朝鮮によって現在の統一國家を保障している。

20) 韓國教員大學國定・図書編纂委員會(2004)「社會4-2」教育人的資源部(文部科學省)

21) 韓國教員大學國定・図書編纂委員會(2004)「社會4-2」教育人的資源部(文部科學省) pp.6~7

6年生の一學期の教科書「社會6-1」²²⁾は、「社會4-2」の教科書より具体的に歴史が記載されているが、事情は中等教育の教科書と同じで、第一章「我が民族と國家の成立」第1條「一つに集まる民族」の「初めて建てた國古朝鮮」と最初から、國の始まりとして檀君の古朝鮮を強調する。そして、國民國家の教育理念として「弘益人間」も載せている。そして、その根據はやはり『三國遺事』である。ここで注目したいのは、その都度その都度載せられている時代時代の國の勢力地図である。その地図とは、「古朝鮮の勢力範囲」²³⁾と、三國時代の「高句麗最盛期の勢力範囲」²⁴⁾「百濟最盛期の勢力範囲」²⁵⁾「新羅最盛期の勢力範囲」²⁶⁾と、「統一新羅と渤海の勢力範囲」²⁷⁾である。これらの地図を比べて気が付くのが、「古朝鮮の勢力範囲」の地図から「統一新羅と渤海の勢力範囲」の地図まで、その領域がほとんど変わっていないということである。これは何を意味するのか。古朝鮮以後の國すべてがその領域内にあるため、檀君の古朝鮮建國を始まりとして、民族・國家が形成され、それがそのまま三國時代・統一新羅まで継承されていることを、本文の説明がなとも視覚的に語ってくれる。檀君の古朝鮮建國を始まりとして統一民族國家が形成され、それがそのまま三國時代・統一新羅まで継承されていることを示すものである。すなわち韓半島は分裂を繰り返すが、その根本は同じであり、統一民族國家として成長発展してきたことを地図は語っている。古朝鮮の領域は定かでない。ここでは、後代の領域が古朝鮮の領域を保障するのである。後代によって保障された古朝鮮の領域が今度は後代の領域を保障し、統一國家としての國土を確立したと言える。初等教科書の韓民族の歴史は古朝鮮の存在によって成立し、それを保障するのが『三國遺事』の檀君の古朝鮮建國の記事である。

さらに、古朝鮮が後代に引き継がれていることが、『中學校 國史』第五章「朝鮮の成立と發展」1條「朝鮮の成立」「1 朝鮮を建てた人たちの國家運営方向は？」の「新しい王朝は古朝鮮を継承したという意味から名前を朝鮮と言ひ²⁸⁾」と、小學校の教科書「社會6-1」第一章「我が民族と國家の成立」3條「儒教を政治の根本とした朝鮮」「1 政治改革による新しい國」の「古朝鮮を継承した意味から國の名を朝鮮と言ひ²⁹⁾」に、具体的に示されている。

22) 韓國教員大學國定・図書編纂委員會(2004)「社會6-1」教育人的資源部(文部科學省)

23) 韓國教員大學國定・図書編纂委員會(2004)「社會6-1」教育人的資源部(文部科學省) p.8

24) 韓國教員大學國定・図書編纂委員會(2004)「社會6-1」教育人的資源部(文部科學省) p.11, 19

25) 韓國教員大學國定・図書編纂委員會(2004)「社會6-1」教育人的資源部(文部科學省) p.12

26) 韓國教員大學國定・図書編纂委員會(2004)「社會6-1」教育人的資源部(文部科學省) p.13

27) 韓國教員大學國定・図書編纂委員會(2004)「社會6-1」教育人的資源部(文部科學省) p.18, 19

28) 「세 왕조를 세운 세력은 고조선을 계승한다는 뜻에서 나라 이름을 '조선' 이라 하고」(國史編纂委員會・國定圖書編纂委員會(2004)『中學校 國史』教育人的資源部(文部科學省) p.127)

29) 「고조선을 계승한다는 뜻에서 나라 이름을 조선이라고 하였다」(韓國教員大學國定・圖書編纂委員會(2004)「社會6-1」教育人的資源部(文部科學省) p.36)

IV. おわりに

以上述べてきたように『三國遺事』に記載された檀君古朝鮮の存在が、民族の普遍性と特殊性を保障することによって、現在の國民國家の理論的根據として、『三國遺事』の世界觀が蘇っていることが分かっていたと思う。しかし、『三國遺事』の世界觀は、本來の仏教の普遍世界觀ではなく、民族の特殊性をもつ國民國家觀として「歴史教科書」にあらわれている。

教科書に表された世界では、日本は古代においてほとんど無視されており、ただ世界の話のなかで簡単に述べられているだけである。つまり韓半島と関わっていない。日本は外の世界にあるのである。そして、民族の特殊性を強調するとき、いつも念頭にいれているのが中國であり、世界を中國と韓國とみ、インドを含んだ仏教の普遍的世界を視野に入れていない。しかし、『三國遺事』の元來の世界觀は、そこに仏教の發祥の地印度、仏教の繁榮の地中國、未來仏教の繁榮の地韓國の三國を世界とするという仏教の普遍的世界の中に自國を見いだすもので、そこに自國の特殊性を認めることはない。教科書に現われた『三國遺事』によって保障された國民國家は、主として國民の單位にまとめられた民族を基礎として18~19世紀のヨーロッパに典型的に成立した統一國家、市民革命を経て國民の一体性の自覺の上に完成したもので、當然『三國遺事』の時代にはない概念である。しかし、『三國遺事』は國民國家を保障するものとして歴史教科書に現われている。

過去に反共極右であった國民が、現在反米感情を高め、北韓を認め中國をパートナーとする。ここに、自國を世界の中心とする古代の『廣開土王碑文』を引き継ぐ中世の『三國遺事』の世界觀があった。この世界觀が、現在の國民國家を保障するものとして、國定教科書『國史』に復活している。これはどこまでも自國を中心とする世界觀で、そこにパートナーとして中國がある。中國の文化圏に韓國を置くものではなく、中國文化圏そして北韓を含む韓國を中心とする文化圏の二つを世界と見、そこには日本は排除されている。當然アメリカもない。

日本の『新しい教科書』と韓國の『國史』は『古事記』『三國遺事』の世界觀によって國民國家を保障し、そこに韓國・中國對日本+(アメリカ)という對立構造を成立させている。そこには、お互いをパートナーと認めるものではなく、共有する世界觀もない。世界觀を共有することなくして、未來を問う兩國の共榮はありえない。この兩國の歴史教科書を、今問いたい。

【参考文献】

- ・ 韓國教員大學國定・ 図書編纂委員會(2004) 「社會3-1」教育人的資源部
- ・ 韓國教員大學國定・ 図書編纂委員會(2004) 「社會3-2」教育人的資源部
- ・ 韓國教員大學國定・ 図書編纂委員會(2004) 「社會4-1」教育人的資源部
- ・ 韓國教員大學國定・ 図書編纂委員會(2004) 「社會4-2」教育人的資源部
- ・ 韓國教員大學國定・ 図書編纂委員會(2004) 「社會5-1」教育人的資源部
- ・ 韓國教員大學國定・ 図書編纂委員會(2004) 「社會5-2」教育人的資源部
- ・ 韓國教員大學國定・ 図書編纂委員會(2004) 「社會6-1」教育人的資源部
- ・ 韓國教員大學國定・ 図書編纂委員會(2004) 「社會6-2」教育人的資源部
- ・ 國史編纂委員會・ 國定圖書編纂委員會(2004) 『中學校國史』教育人的資源部(文部省)
- ・ 國史編纂委員會・ 國定圖書編纂委員會(2004) 『高等學校國史』教育人的資源部(文部省)
- ・ 末松保和(1964) 『三國遺事解説』學習院東洋文化研究所本
- ・ 金東旭(1968) 『三國遺事』 韓國의 名著
- ・ 金鐘權(1993) 『完譯三國史記』 明文堂
- ・ 權五曄(2004) 『廣開土王碑文의 研究』 J&C
- ・ 崔南善篇(1999) 『三國遺事』 瑞文文化社
- ・ 河炫綱(1989) 『韓國中世論』 新丘文化社
- ・ 河炫綱(1989) 『韓國中世史研究』 一潮閣
- ・ 韓國史研究會篇(1981) 『韓國史研究入門』 知識產業者
- ・ 神野志隆光(1986) 「古事記の世界観」吉川弘文館
- ・ 神野志隆光(1983) 「古事記の達成」東京大學出版會
- ・ 神野志隆光(1999年) 『古事記と日本書紀』 講談社
- ・ 佐伯有清(1983) 「古代の東アジアと日本」教育社

要 旨

韓日間の争点の一つに歴史教科書問題がある。この歴史教科書というのは、単に教科書の問題でなく、これによって過去をそして現在未來に繋げるべく國民教育がなされるため、問題は深刻である。日本は古代、『古事記』は天皇を世界の秩序の中心とする世界觀を完成させ、そこに韓半島を含んだ。これは、戦前の大東亞という世界觀に引き継がれ、現在、國民國家を保障するものとして扶桑社の『新しい歴史教科書』に見事に復活し、多くの支持を得ている。そこでは、アジアは日本を盟主とする大東亞共榮圈の傘の中にあり、對等のパートナーとしてアジアは存在しない。パートナーとして存在するのは、大東亞共榮圈の外の世界に君臨する強大國家アメリカだけである。

ならば、韓國の國定教科書『國史』はどうか。教科書『國史』も『新しい歴史教科書』と同じく單一民族國家つまり國民國家を描くと同時に、民族の特殊性を強調している。そして、それを保障するものとして『三國遺事』の世界觀が存在する。『三國遺事』は檀君の古朝鮮を韓民族の國の始まりとし、中國の皇帝に匹敵する自己の王をそこに描きいる。しかし、『三國遺事』の元來の世界觀は、そこに仏教の發祥の地印度、仏教の繁榮の地中國、未來仏教の繁榮の地韓國の三國を世界とするという仏教の普遍的世界の中に自國を見いだすもので、そこに單一民族國家そして自國の特殊性を認めることはない。教科書に現われた『三國遺事』は國民國家を保障するものとして新た蘇ったといえる。國民國家は、18~19世紀のヨーロッパで完成したもので、當然『三國遺事』の時代にはない概念である。しかし、『三國遺事』は國民國家を保障するものとして歴史教科書に現われている。その世界觀は自國を中心とする世界觀で、そこにはパートナーとして中國がある。中國の文化圏に韓國を置くのではなく、中國文化圏そして北韓を含む韓國を中心とする文化圏の二つを世界と見るものである。そこには日本は排除されている。

韓日兩國の歴史教科書は、それぞれ『三國遺事』『古事記』の世界觀をそこに國民國家を保障するものとして蘇らせ、韓國・中國對日本+(アメリカ)という對立構造を成立させた。そこには、お互いをパートナーと認めるものはなく、共有する世界觀もない。世界觀を共有することなくして、未來を問う兩國の共榮はありえない。この兩國の歴史教科書を、今問うべきである。

キーワード：歴史教科書 國民國家 世界觀 扶桑社 『三國遺事』 『古事記』

투 고 : 2005. 11. 30

1차 심사 : 2005. 12. 10

2차 심사 : 2005. 12. 31

住 所 : (570-749) 전북 익산시 신용동 344-2 원광대학교 사범대학 일어교육학과

電 話 : 063-850-6523(직통)/063-850-6520(사무실)

e-mail : kannan@wonkwang.ac.kr